

特殊児の指絵について

中西昇・小西勝一郎・並河信子・山田聖子

THE FINGER-PAINTING OF EXCEPTIONAL CHILDREN

By NOBORU NAKANISHI, KATSUICHIRO KONISHI,

NOBUKO NAMIKAWA AND SEIKO YAMADA

目 的

我々は指絵による人格診断上の基本的資料を得るために Blum や Dragositz 或は Ogrady らの研究を参考とし、幼児を中心に研究してきたが⁽¹⁻⁴⁾今回は施設児、精薄児、虚弱児及び精神病児等の特殊児と普通児の指絵を比較し、その特性を明らかにせんとするのが本実験の目的である。

方 法 及 び 手 続

I. 実 験 方 法

指絵の描かせ方、記録及び結果の処理は前研究に準じて行ない、Dörken が紹介した H. Lehman の評価尺度⁽⁵⁾にて指絵を検討した。

その尺度は第1表の通り4カテゴリーに分けて評価せんとしたものであるが、我々はこの方法が主観的になりやすい描画の評価に於て意義あるものと考えた。そこで Energy Output に 於ては虚弱児、Contact with Reality に於ては精神病児、Affective Range に於ては施設児、Clarity に於

第 1 表 H. Lehman の 評 価 尺 度

得点	Energy Output	Contact with Reality	Affective Range	Clarity
0		何ら内容なし		
1	塗る、よごす	朦 朧	黒、褐、紫	よごれ、渾沌としている
2	点をうつ	異 様	青、緑	
3	薄い線	非現実	赤、黄、橙	
4	画面の1/2使用	意味のないくり返し		はっきりしない
5	画面の1/2以上使用	文 字		朦朧としている
6	変化ある derigen	symbolism		少々貧弱である
7	普通の圧があり、釣合	abstract design		少し明瞭、→正確に
8	のとれた持続的な stroke	風 景		
9	画面の3/4以上の使用	建物又は舟		非常に慎重→小心翼翼と
10	ぬりかさね	人		
11	ひっかき	動植物		
12	破る	事 物		

ては精薄児がその特性に応ずるとの仮説のもとに指絵の分析を行った。

II. 実験対象

上述の如く比較対照するために我々は次の如く被験者を選んだ。年令は学令4・5・6年児。但し精神病児は別である。

1. 普通児：大阪市立日吉小学校の児童。男子30名，女子30名，家庭状況，生活程度，性格，学業，知能等中程度の健康な児童。

第 2 表 被 験 者

a 1. 施設児と普通児の比較

	性別	人数	平均 年令	S. D (月)	平均知能 (I, Q)	S. D	range
普通児	男	21	11: 1	10.8	105.1	11.6	130—84
	女	22	10: 11	12.1	100.0	8.25	120—83
施設児	男	21	10: 9	11.3	96.3	7.8	109—85
	女	22	10: 11	10.7	99.5	12.4	116—81

a 2. 施設児の入所理由

施設入所の理由		男	女
遺 棄		1	0
離婚、あづけたまま、その他による 遺棄		5	6
離婚又は死別のため	父の就職・入院のため	4	5
	父と浮浪	2	2
	母の就職・入院のため	3	1
	母と浮浪	1	0
父母の死		2	2
不良環境		2	2
刑務所入所のため		1	4
計		21	22

b 精薄児と普通児の比較

	性別	人数	平均 年令	S. D	平均知能	S. D	range
普通児	男	23	10: 7	8.6	111.6	10.7	130—89
	女	21	10: 7	8.6	106.2	9.2	120—83
精薄児	男	23	10: 10	10.6	51.4	4.0	65—40
	女	21	10: 9	9.0	55.3	4.4	70—44

c 1 虚弱児と普通児の比較

	性別	人数	平均 年令	S. D	平均知能	S. D	range
普通児	男	8	10: 5	9.0	102.6	6.4	111—95
	女	18	10: 3	10.1	102.7	8.7	120—83
虚弱児	男	8	10: 1	4.9	105.5	17.2	126—81
	女	18	10: 2	11.0	99.6	14.2	128—80

c 2 虚弱児の養護学校入所理由及び病名

養護学校入学理由	男	女
結核のアフターケア、及び要注意	5	9
結核の他にも病気のある者	1	1
普通虚弱	0	4
発育不良	1	3
心臓疾患	1	1
計	8	18

d 精神病児について

男	17: 10	分 裂 病
//	14: 0	自 閉 症
//	13: 2	分 裂 病
//	11: 1	分 裂 病
//	10: 9	//
//	9: 9	// (らしきもの)
//	7: 6	分 裂 病
//	5: 6	//
女	12: 11	//
女	9: 6	// (らしきもの)

2. **施設児**：弘済院，博愛社，四恩院，近江学園の各施設の児童。男子21名，女子22名，知能程度が普通で健康な児童。

3. **精神薄弱児**：近江学園，思齋小学校，堺市立養護学校，大阪市立元町小学校の児童。男子23名，女子21名。I.Q. 40～70。

4. **虚弱児**：堺市立養護学校の児童，大阪市立大学附属病院小児科虚弱児ドック入院児童。男子8名，女子18名。

5. **精神病児**：大阪市立大学附属病院の神経科で分裂病と診断された児童及び水口病院入院中の児童，計10名。

比較検討に当っては普通児と各グループの児童を学年別，性別に人数を合せ任意にとり出した。その内容は第2表の通り。

調査期日は昭和32年7月より11月まで。

結果とその考察

指絵の評価は表記研究者合議の上決定した。結果の処理に当って(I)我々の以前とった一定の特徴の有無についてまとめると第3表の結果を得る。また，(II) H. Lehman の方法に従って評価すると第4表の如くなる。

I. 一定特徴の有無についての結果

普通児との比較において有意差のあったものは，

1. 施設児：普通児

施設児には画面全体に混色している者が多い。 $(\chi^2=6.401, 0.025 < p < 0.01)$ 施設児は人差指でかくのが多い。 $(\chi^2=4.995, 0.025 < p < 0.01)$ 施設児ではすぐかき始めるものが少ない。 $(\chi^2=4.995, 0.025 < p < 0.05)$ 施設児には画面全体にかく者が少ない。 $(\chi^2=6.426, 0.025 < p < 0.01)$

2. 精薄児：普通児

精薄児には人差指だけでかく者が多い。 $(\chi^2=6.899, p < 0.01)$ 精薄児は画面全体に混色するのが多い。 $(\chi^2=4.162, 0.02 < p < 0.05)$ 精薄児は三種以上の運動をする者が少ない。 $(\chi^2=4.525, 0.02 < p < 0.05)$ 精薄児は最初に緑を選んだ者が少ない。 $(\chi^2=6.509, 0.01 < p < 0.02)$ 精薄児は描画内容としての自然や植物の数が少ない。 $(\chi^2=13.349, p < 0.01)$ $(\chi^2=9.913, p < 0.01)$ 精薄児には画題や表現が第三者に分る者が少ない。 $(\chi^2=34.234, p < 0.01)$ 精薄児は描画中に水や布を使うものが少ない。 $(\chi^2=4.631, p < 0.01)$ 精薄児の描画時間は短い。 $(t=2.17, 0.05 < p < 0.025)$

3. 虚弱児：普通児

虚弱児は単色でかいた者が多い。 $(\chi^2=6.564, 0.01 < p < 0.02)$ 虚弱児は自分の描いた絵を家に持って帰りたいと云った者が多い。 $(\chi^2=4.150, 0.02 < p < 0.05)$ 虚弱児には青 $(\chi^2=11.885, p < 0.01)$ 茶 $(\chi^2=6.470, 0.01 < p < 0.02)$ 黒 $(\chi^2=6.314, 0.01 < p < 0.02)$ 及び紫 $(\chi^2=3.913, 0.02 < p < 0.05)$

第3表 結 果

(数字は該当人数 *は普通児との比較に於て有意差のあるもの)

		普通児施設児		普通児精薄児		普通児虚弱児		精神病児
被 験 者 数		43	43	44	44	26	26	10
I 色 彩								
最初に選んだ色	赤	9	5	9	13	4	5	1
	橙	1	5	3	5	2	2	6
	黄	5	4	5	7	4	6	0
	緑	31	11	12*	3*	4	5	0
	青	2	2	3	3	3	0	1
	紫	2	3	2	5	2	2	0
	茶	8	11	8	2	6	0	0
	黒	3	3	2	6	1	6	1
描画中に使用した色	赤	26	27	30	35	17	15	3
	橙	22	24	23	22	15	8	6
	黄	28	27	27	27	18	13	3
	緑	30	30	33	27	21	17	3
	青	23	22	24	22	17*	5*	1
	紫	24	24	26	29	14*	7*	2
	茶	28	30	32	24	20*	11*	1
	黒	27	27	28	28	19*	10*	2
描画中に使用した色の数	1	8	7	6	10	2*	11*	7
	2	2	2	3	1	2	0	0
	3	4	6	4	7	2	4	1
	4	4	4	5	2	3	2	1
	5	5	6	4	4	2	3	0
	6	5	4	5	5	4	1	0
	7	8	6	9	5	0	3	0
	8	7	8	8	10	6	1*	0
5色以上使用している		25	24	25	25	7*	9*	0
画面の一部に混色がある		13	22	19	22	17*	3*	0
画面全部を混色している		3*	12*	3*	11*	11*	0	1
II 描画運動								
3種以上の運動をする		16	15	17*	8*	13	10	3
人差指だけでかく		2*	12*	2*	20*	1	5	4
掌も用いて手全体でかく		2	4	4	3	1	4	0
左右両手を用いる		3	4	2	6	1	1	0
線の強さが普通又は普通以上である		36	35	30	26	16	12	0
mutilation がある		9	6	9	10	7	6	0
クレパス的かき方である		20	18	15	17	8	9	2
III 言 語								
テスト中に質問、補助を求める		22	23	23	17	12	11	0
描画中に独言をいう		7	10	7	14	4	1	2
IV 其の他								
すぐかき始める		31*	22*	31	30	13	17	0
描画中に水、布を用いた		23	22	24*	14*	17	13	3
全面に描く		26*	12*	26	26	17*	8*	0
separate placement		4	2	5	3	3	0	0
画題が第三者にわかる		33	28	34*	6*	18	14	0
家に持って帰りたい				4	4	2*	9*	0
面白かった		31	27	30	33	16	15	0

描画面積、描画時間、描画内容等は紙面の都合上割愛した。

第 4 表 H. Lehman の評価尺度による結果

	Energy Output		Contact with Reality		Affective Range		Clarity	
	合 計	平 均	合 計	平 均 (S. D.)	合 計	平 均 (S. D.)	合 計	平 均 (S. D.)
普 通 児	349	8.12	394	9.16	361	8.40	319	7.42*
施 設 児	325	7.37	386	8.98	356	8.28	264	(1.91) 6.14* (1.46) 7.29*
普 通 児	340	6.83	393	8.93*	393	8.98	321	(1.48) 3.52*
精 薄 児	326	6.27	181	(1.75) 4.11* (4.20)	376	8.54	155	(2.30)
普 通 児	205	7.88	226	8.69	265	10.19*	180	6.92
虚 弱 児	193	7.42	213	8.19	176	(5.13) 6.77* (4.28)	163	6.26
精 神 病 児	40	4.00	10	1.00	46	4.60	11	1.10*

* 普通児との比較に於て有意差のあるもの

の使用が少い。虚 弱 児に 5 色以上の使用者が少い。 $(\chi^2=5.307, 0.02 < p < 0.05)$ 虚 弱 児には画面の一部に混色のあるものが少い。 $(\chi^2=4.613, 0.02 < p < 0.05)$ 虚 弱 児の描画時間は短い。 $(t=2.86, p < 0.01)$

4. 精 神 病 児

実験対象が少いため統計処理を行わなかったが、人差指のみで単色でかき、描画面積も狭く、最初の選色は橙が多い様である。描くという意味を理解していない者が大部分であり、描画内容は方向もなく、支離滅裂で一見して異様なものが感ぜられる。

II. H. Lehman の方法による評価の結果

普通児と各グループとの比較において t 検定の結果有意差のあったものをあげると

1. Energy Output

各グループに差違はなかった。しかし精神病児は非常に低い。

2. Contact with Reality

精薄児が低く ($t=7.22, p < 0.01$ cokr-an-cox 法) 更に精神病児が低い。

3. Affective Range

虚 弱 児が低い。 $(t=2.57, 0.02 < p < 0.05)$

4. Clarity

施設児が低い。 $(t=4.11, p < 0.01)$

精薄児も低い。 $(t=9.71, p < 0.01)$

更に精神病児が低い。

Energy Output, Affective Range の項目が始めの仮説に従わなかった。この尺度は Dörken が実施した精神病患者の様な極端な者には妥当性がある様である。しかし本実験の如く異常児グループに於ては始めの仮説も検討の要があるが更に研究しなければならないと考えられる。

又彼の評価尺度は実施に当り、なお主観的判断にたよらざるを得なかった点も今後更に問題にしなければならない。

要 約

特殊児の指絵の特性を明らかにせんとして学令4～6学年の施設児、精薄児、虚弱児、及び精神病児の指絵と普通児の指絵を年令及び性を合せて比較検討した。

(I) 従来の分析において、各々のグループと普通児を比べ差違の認められたものをあげると、施設児：描画面全体の色、人差指のみの使用指示してから描き始めるまでの時間、全画面の使用。

精薄児：最初の選色における緑、描画面全体の色、人差指のみの使用、三種以上の運動、自然や植物の表現数、画題や表現の第三者による理解の有無、描画中の水や布の使用、描画時間。

虚弱児：単色使用、自分のかいた絵を家庭に持ってかえりたいかどうか。青、茶、黒及び紫の使用、5色以上の使用、描画面の一部の色、描画時間。

精神病児：(統計処理を行っていないが次の様である) 人差指のみの使用、単色使用、描画面積、最初の選色における橙、支離滅裂な表現。

(II) H. Lehman の評価尺度による比較は、施設児では Clarity, 精薄児では Clarity と Contact with Reality 虚弱児には Affective Range, 精神病児に於ては全項目に差違がある様である。

精神病児の様な極端なものには差違が認められる様であるが、今回の如き異常児に於てはその実施に検討の余地がある事が認められた。

追記、本研究に当り、関係各施設、学校、病院の方々から多大の助力を得た。茲に厚く感謝する。

文 献

- (1) 中西昇, 小西勝一郎, 並河信子: 本紀要, 2, 319 (1955)
- (2) 小西勝一郎, 並河信子: 幼児の教育, 54—9, 30 (1955)
- (3) 中西昇, 小西勝一郎, 並河信子, 阿部洋子: 幼児の教育, 55—9, (1956)
- (4) 中西昇, 小西勝一郎, 並河信子: 本紀要, 5, 63 (1958)
- (5) H. Dörken: J. Projtech., 18, 169 (1954)

SUMMARY

The purpose of our study is to investigate the characteristics of the finger painting by the exceptional children comparing with ones by normal. The age of subjects used is from 4th to 6th grade of the primary school.

The results are as follows.

1. We found several differences between the finger paintings of two groups (exceptional & normal), through Alper and others' methods.
2. Applying H. Lehman's scale, it seemed there were some distinct differences between normal and exceptional, selectively, the extreme such as psychotics. But as for other exceptional children questions were remained.